



関東原野シラカバの林

土地への誓い

端木蕨良

(訳 富永絹子)

広大な関東原野に対して、私は深く熱い愛の心をもって懐かしむ。私には、大地が私の名前を呼び、帰ってこいと呼びかけているのが絶え間なく聞こえてくる。

時々手を胸に当て、私は自分の心臓がまだ鼓動しているのを知る。私の心臓にはまだ熱い血が湧き上がっているのを知る。なぜなら、心に情熱が溢れ出ているのを、私は常に感じるからである。

大地の上に横たわる時、空の星々仰ぎ見、手に泥土を掴む時、あるいは子供の頃のことを回想する時、あの空高くそびえる青緑のカバノキ林の木を思い出す。真直ぐ伸びた美しいカバノキは原野で苦しみにうなされているのだ。私には激流のような馬の群れや、深夜吼え叫ぶ蒙古犬が見え、鞭打つ音が谷川を転がり落ちて響いているのが聞こえてくる。紅い布のような高粱、黄金色の大豆、真っ赤な頬、黒い瞳、彩り豊かな山並み、駆け巡る鹿の群れ、松の香りを帯びた石炭、赤

みがかった純金が思い出される。晴れた日、道を走って行く馬につけられている鈴音が残すひそかな響き、深夜に聞いた狐仙姑〔東北地区に伝わる民間伝承〕の語り、原野を吹き荒れる強くて恐ろしげな風……が思い起こされる。

その時、故郷が私に帰ってくるようにと呼びかけているのが聞こえる。故郷はある種の声で私を呼んでいる。

その声は小さく、あんなにも切羽詰っているので、私は帰らざるを得ないのだ。

私は、いつもこれらの声に纏わりつかれて、どこへ行ったとしても、たとえ深い眠りについていても、あるいは夢の中から突然目覚めた時でさえも、もう帰らねばならない時だと突然思うのだ。

私は帰らねばならない。そこから離れるとはずっと思っていなかったのだ。その声は止めることはできないし、選ぶことはできない。これらの声はもう私の心と永久に繋がり合った。

故郷を思い出す時、その大地の深い層で真っ赤にふつふつとたぎる液体が私には見える。そうだ、その声はあそこから来たのだ。あの古い地層の中には燃え上がっている奔流があり、それはまるで私の心臓の湧き上がる血のようだ。いつも手を大地の上に置くと、私の心の鼓動と同じように大地もまた鼓動している。それはもう知っていたことなのだ。それらはずっと停止することはなかった。熱い血はずっと流れ、お互いに知らず知らずのうちに呼び合って、ついにある日、合流するのだ。

大地は母であり、私のわずかな皮膚にもすべて土がある。手が大地に触れるとすぐに心は落ち着く。

私は土地につながる一族の者であり、その一族から離れることはできない。故郷の土地に私は無数の足跡を^{しる}印している。あの畦道には明るい私の笑いが葬られ、あの稲穂の上ではイナゴを捕まえた。あの重い鍬には私の手の跡が留められている。私はかつて自分で作った白菜を食べた。

故郷の土は香り高い。春、東の風が吹き始める頃になるとすぐ、土の香りが田野の風に乗って漂ってくる。河はさらさらと流れ、柳の枝はひとしきりの^{ぬかあめ}糠雨の

ように見る間に成長し、空気はそれら喜びの声を含んでいる。原野の至る所で叫び声が上がり、空は高く澄み渡り、労働の音がこちらからあちらへと響いている。

秋、銀糸のような蜘蛛の糸が牛の角にかかり、荷車は穀物を引いて帰り、スズメは食べ飽きて彼方此方に飛んでいる。稲の香りは強く、空き地ではもみを摺るゴロゴロという音が響く。何と豊かで、何と美しいことか……ああ、誰も故郷の大地を忘れることなどできはしない。

私は故郷の大地のために戦うのだ。土地、原野、私の故郷、あなたは必ずや解放され、立ち上がらねばならない！

夜になると馬のひづめの駆ける音が聞こえ、草原の息子は夜明けの空に呼びかける。この時私は起き上がり、天空の北にある大熊座を探す。金色の光りの下、そこそが私の故郷なのだ。空が暁に染まるまでそこをじっと、じっと見つめる。

私は永遠に忘れることはできない。なぜなら、私は故郷の大地に応えたからだ。私は彼女のもとへ帰る。「必ず帰る」と、その求めに応えたからだ。

大地のためには喜んで一切を差し出すのだ。私は必ず更に美しい故郷が私の目の前——あるいは私の墓の前に現れるのを見るだろう。そして自分の涙をもって、その一切の穢れと恥辱を洗い流してしまおう。

“九一八”十周年に記す

.....
端木蕻良 (Duānmù Hòngliáng) 1912-1996 : 遼寧省出身。

1932年清華大学歴史学部に入學。同年に中国左翼作家連盟に参加し、三十年代の「東北作家群」の一人として社会に影響を与える作品を発表しつづけた。

本訳に使用したテキスト『語文』七年級(下)、北京人民教育出版社、pp. 59-62.

心的跳跃是一样的。它们从来没有停息，它们的热血一直在流，在热情的默契里它们彼此呼唤着，终于一天它们要汇合在一起。

土地是我的母亲，我的每一寸皮肤，都有着土粒；我的手掌一接近土地，心就变得平静。

我是土地的族系，我不能离开她。在故乡的土地上，我印下我无数的脚印。在那田垄里埋葬过我的欢笑，在那稻颗上我促过蚱蜢，在那沉重的镐头上留着我的手印。我吃过我自己种的白菜。

故乡的土壤是香的。在春天，东风吹起的时候，土壤的香气在田野里飘扬。河流浅浅地流过，柳条像一阵烟雨似的窜出来，空气里都有一种欢喜的声音。原野到处有一种鸣叫，天空清亮透明，劳动的声音从这头响到那头。

秋天，银线似的蛛丝在牛角上挂着，粮车拉粮回来，麻雀吃灰厌了，这里那里到处飞。稻禾的香气是强烈的，碾着新谷的场院辘辘地响着，多么美丽，多么丰饶……没有人能够忘记她。

我必定为她而战斗到底。土地，原野，我的家乡，你必须被解放！你必须站立！

夜夜我听见马蹄奔驰的声音，草原的儿子在黎明的天边呼唤。这时我起来，找寻天空中北方的大熊，在它金色的光芒之下，乃是我的家乡。我向那边注视着，注视着，直到天边破晓。

我永不能忘记，因为我答应过她，我要回到她的身边，我答应过我一定会回去。

为了她，我愿付出一切。我必须看见一个更美丽的故乡出现在我的面前——或者我的坟前。而我将用我的泪水，洗去她一切的污秽和耻辱。

“九一八”十周年写

□□□□□